

色彩の持つ非言語的機能：

異文化コミュニケーション学的見地からの通時的・共時的一考察

ジョリー 幸子

I. はじめに

色は森羅万象、我々の生活環境の全てに存在する現象である。しかし、その存在が普遍的で当たり前であるが故に日常は改めて意識することは余りない。けれども、一民族一社会的行動の中でコミュニケーションとしての色の使い方を一つ間違えると、その人物の非常識さ、或いはセンスのなさを非難されることも多々ある。異文化における企業に赴任したり、留学、ホームステイ、或いは短期の旅行においても、文化により色彩によるコミュニケーションの様式が違うことに気付く。テレビ、新聞等のニュースメディアを通して見ても例えば、日本の女性閣僚や議員のスーツ姿は赤、空色、黄色、ピンク等の明るい色で、しかも単色が多いことに気付く。これは複数色の組み合わせられたデザインによる服地よりも、単色の方がより鮮明で鮮やかなことから、人目を引くからであろうと想像される¹⁾。

II. 目的と研究方法

当研究では、色彩の持つ非言語的役割を日本国内と多文化間との比較、対照によって記述、分析することにより、我々が日常どのようにして色を駆使してコミュニケーションを計っているか、或いはその誤用により否定的結果をもたらしているか等、歴史的経緯から見た通時的分析 (Diachronic analysis) をも考慮に入れた上で、今日の色彩の持つ非言語行動的意義について、現状を共時的分析 (synchronic analysis) を実施することにより、今後益々グローバル化するビジネス交流や文化の交流にコミュニケーション上の貢献をすることを目的とする。

III. 日本の伝統文化の通時的歩み

1. 支配階級によって決められる色

最初に、日本の色彩の分析を古代からの通時的方向に向けてみる。我が国の古来の人々の衣服の色はまだ染色技術も余り発達しておらず、原材料の繊維本来の色で着用していたのであろう。聖徳太子が6世紀末(593A.D.)に摂政となり、594年に仏教興隆の詔を發布した。そして603年には「冠位十二階」を制定し、右の図のように紫色を最高位とし、青、赤、黄、白、黒の順で、朝廷に勤める役人たちに対しては、各々の身分や役職の衣服に対して厳しい色の振分けが

冠位	色	冠位	色
大徳	むらさき	大信	き
小徳		小信	
大仁	あお	大義	しろ
小仁		小義	
大礼	あか	大智	くろ
小礼		小智	

義務付けられた²。8世紀初頭、文武天皇の御代「大宝律令」により更に中央集権的政権の基礎が固められた。当規定では、紫・緋（あか）・緑・縹（ひょう）又は「はなだ色」³の4色を各々濃淡に染め分けて階位の等級を表した。律令にはこれらの色を含め、全部で18種の色による序列が決められたのである。

これについて武田は「自分の身分より下のランクに属するものは自由に着てもよいが、上のランクの色を着用するのは禁じられていた。だから上級身分の者の色の選択肢はとても豊かだが、身分が低くなるに従って範囲がせばめられるしくみになっていた。位階をもたない庶民に許された色は、小枝混じりの木葉を煮出して染めた黄色系統のものとか、ハンノキの実を蒸し焼きにして作った黒っぽい色の衣服くらいしか着られず、最下層の奴婢（ぬひ）にいたっては、ドングリで染めた墨色の衣服しか着られない規定であった。」⁴と記述している。

中国の唐時代の文化全般を移入して醸造された我が国の色彩文化は、「藤ノ木古墳」で発掘された当時の支配者、貴族たちがまとった衣裳や装飾品には確かに大陸文化を真似した極彩色の煌びやかな物も観察される。しかし、これらの服飾品（アクセサリ）を着用する習慣は今日「十二単衣」と呼ばれる平安朝の女房装束や、衣冠束帯が着用される平安時代以降、姿を消してしまう。従って和服にはイヤリング、ネックレス、ブレスレットといったジュエリーを身に着けないのが現代の装道の約束事となっている。

武田は上記述について以下のように説明している。「私はこの理由を、日本が独特の衣服の美意識を発達させたであろうと推測している。首飾りや耳飾り、指輪にブレスレットというような、アクセサリとの組み合わせの美として衣服の文化が発達せず、衣服そのものの色の取り合わせ、いわゆるかさ襷ね色目に美を競うという、美意識の日本的展開が、アクセサリを不要としたのである。」⁵

2. 重ねた複数色による美

ここで、留意したいのは、この華やかな美しい色の重ね合わせでできる日本の美意識も、西洋的色彩、衣服に関する常識から考慮すると異文化に於いては当然の価値判断のずれが観察されて興味深い。英語には“wear（衣服）”によって総括される“underware（下着）”と表面から他人が見ることができる“outerwear（外着）”の区別がある。欧米人にとっての上着、下着の二極区別観から言えば、上着以外は「下着」となる。一方、十二単衣を始め、着物の美しさにはあの最表面（上着）の衿、袖口、及び裾回りに見える上着の下に、意図的に重ね合わされた色々の織り成す下に着る多彩な「下着」の対照や調和に存在するのである。

渡米生活20年を経過した、ある夏の午後ハワイ大学キャンパス内の「東西文化センター」の横にある日本庭園に建てられた茶室の側で、筆者は大寄せの茶会に集う着飾った多民族の人々と談笑しつつ茶席に入る順番を待っていた。ハワイ大学では大学院の「アジア研究学」の中に、日本の茶道が組み込まれており、白人系の男女学生の中にも羽織、袴、和服を着ている若者も多くいた。アメリカ人達の出会いの時の挨拶には相手の衣服、装飾品を褒める習慣がある。一人の20代半ばの白人男性が渋い紺色の着物（上着）に、濃緑の襦袢の衿を覗かせていたので、

その粋な配色の取り合わせを褒めた。しかし、使用言語が英語であったことから予期せぬ事態が起こった。教員である筆者が「Your color coordination of Kimono and the underwear collar is attractive!」（あなたの着物（上着）と下着の衿の色合わせがとても素敵ですね）と誉めると、その若者は顔を真赤にして筆者に怒鳴り返して来た。「この様な公共の場で、僕の下着について言及して恥をかかせる積もりですか！」筆者は現在なら持ち合わせている衣裳に関する異文化コミュニケーション論と色彩の非言語的意義に関する知識、説明力をその時はまだ余り意識しておらず、説得力を持っていなかったことを口惜しく思っている。日本人は（襦袢の）衿は見せるものであり、「下着」とは考えない。しかし英語の概念で言えば襦袢は上着ではない。あくまでも内側の衣裳なのである。英語の“underwear”という言葉は、その意味の大部分が人間の性的な部分をまとう衣類であることを考慮すればそれは、「下着」と訳すのではなく現代日本語では余り口にされなくなった「肌着」に等しい意味を持つと解釈すべきであろう。

IV. 色の濃淡（シェード）の相違が伝えるコミュニケーション

1. 哀悼の意

通夜や告別式後に参列者に配布される「お返しの商品」に添付される会葬礼状、或いは後日、香典等への返礼として喪主より送られてくる挨拶状に印刷される文字は、いわゆる薄墨色 (shaded black) で、灰色がかった淡い色合いの文字でメッセージが印刷してある場合が多い。これは漆黒の墨が力強さや生命力を表現することから、淡い色調で人の死を悼む意の表出方法として考案されたものとする。反対に言えば、日常の挨拶状は濃い墨色、又は明度の低い黒色インクの色調を使用し、一方弔意を表す場合は文字の墨を薄くして明度を上げることにより、発信者の意図を表すのがマナーであると言える。

全国に支店を置く、デパート等の包装紙や紙袋の色は通常は鮮やかなピンク（高島屋、三越）、赤（松坂屋）などが中心である。「色が人目を引く機能を誘目性 (attention value) 」というが、彩度（色の派手さ、地味感又は鮮やかさ）が高く、且つ暖色系であることが誘目性を高める条件となっている。従って大量消費を担う大衆をターゲットとした商品のパッケージ、企業のロゴマークや看板には誘目性が高い赤や黄、オレンジの組み合わせが多く、そのような配色を使用した看板の目立つ界限は、「派手な印象がある」⁶。

これに対して法事や告別式等の仏事の引出物の紙袋は、先述の弔辞の挨拶状の説明が薄墨色のメッセージで伝達されたのと類似して、紺と灰色のシェードの薄いもの（三越）が一般的のようである。これは上述の通り、色の明るさを表現する明度の度合いの低い色ほど重く、暗い印象を与えると判断されて、コミュニケーションの喜怒哀楽の「哀」の意味合いを表現するからであろうと考えられる。筆者のヨーロッパ人の同僚がある時入院中の筆者への、見舞い品として、彼の出席した仏事の帰りにその引き出物の灰色と紺色の模様のある包装紙のまま「早くよくなって」と置いていった。筆者の本心は「私はまだ生きているのに」とその「哀」の色の包装紙の色彩が妙に気になった経験がある。

2. Gradationの技術

平安朝時代の日本各地にはまだ顕著には存在しなかったと思われる和の美の技術が、鎌倉初期には現れ始めている。一般農民や町人には縁が遠かったであろう、その技術の代表的なものが「ほかし」の色彩技術である。天皇、公家などの朝廷を取り囲む京都の雅（みやび）が貴族や地方の一部の武家の衣裳としてもゆっくりと浸透していった。今日でも「ほかし」又は、“gradation”⁷と呼ばれる「規則的な色相の明度、彩度などの変化や形態・質感などの造形上の変化をさす」、技術は染物師の苦心、努力するところである。そのファッション性、美的価値は服飾のみではなく、サングラス、暖簾、つい立て、食器等の日常装飾品 (objectics) インテリア的アイテム等にも認められ広く使われる色彩技術である。

マスメディアにおけるテレビの天気予報などでも、気温の高い地域ほど濃い赤色を使用し、気温が低くなるに従って赤の濃さが減少し、少しずつ青色味を帯び、最低温度は、(寒さを表現する) 濃い青で表現されるという「ほかし」の描法で温度の推移を顕している。自然界にもこの gradation 現象は存在する。樹木や人間の影は光源に一番近い根元や足元などが最も濃い影(黒)で、樹木の頂点や人間の頭の部分はシェードがほやけてくる。地図上でも高い山は濃い茶色で表現され、高度の低い山はほかしの黄土色を経てやがては緑色の平野に達する。

V. 民族性、国民性と色彩の関係

1. 職業に付随する色のステレオタイプ

上述の現象を世界の地域に当てはめてみると、一般的に年間の平均気温が暖かい地方では明度の高い、彩かな色彩を好んで用いると観察される。その顕著な例は熱帯、亜熱帯地方の民族衣装によって代表される。例えば、ハワイ諸島に住む女性達が日常着用するムームー、男性のアロハシャツ等には、原色の色使いが多くて、ポリネシア系のトロピカルな花模様や椰子の木に代表される熱帯の植物や魚貝類等の生き物が、モチーフとして生き生きと描かれたものが好まれる。

筆者は日本の厳冬の正月4日、積雪で銀世界と化した氷点下2度の夕刻の名古屋空港から、10時間余り南半球に向かって飛行し、シドニー空港に翌朝着陸して驚いた。気温差が約30度もある真夏のオーストラリアの暑さに体がついて来れず、その場で体調を壊してしまった。その夜、現地時間11時にシドニーの救急病院へ友人が連れて行ってくれた。診察室に現れた派手な色彩のピキニスタイルの水着姿の若い女性が夜勤当直の医師であったのだ。自身の病状を英語で彼女に訴える筆者の心境は、複雑極まるものであったことは言うまでもない。日本では、各種職業に対してのステレオタイプの固定イメージの服装や色使いが存在し、医師や看護師等病院の職員達は、白衣と聴診器で患者に接することが臨床マナーであると考えているからだと分析したが、それでもその現場で自分自身を説得することは容易ではなかった。着用する衣類の色彩及びデザイン等が、その人の職業や資格に対しての信頼度にまで心理的影響を与えるという事実を確認した。

2. 民族による色彩と語彙

「言語相対論」として知られるサピア＝ウォーフの仮説 (Sapir-Worf Hypothesis)⁸によると、「われわれの宇宙観 (cosmology) や、世界の切り取り方、経験の様式、統率の仕方などは、われわれの用いる言語が異なれば、それに対応して異なるという仮説のことを言う(安井 1971)⁹」
「たとえば、米国アリゾナ州辺に居住するアメリカ・インディアン（現在では“Native Americans”と呼称する）のホピ語 (Hopi) では、ある行為が、瞬間的に起こるものか継続的であるかについては区別するが、英語のように、それが過去に起きた出来事かそうでないか、などという時制の区別をしない。そのためホピ語の話者は、そのような英語と違う網の目をとおして世界を眺めるので、同じ事柄に対しても、英語の話者とは違った判断をする。」¹⁰

当該民族の生活環境が言語や思考に影響を与えるという上記の「Sapir - Whorf 仮説」は、コミュニケーションの条件としてその基礎をなす語彙の分化にも関連してくる。我々日本民族が雪の色としての概念を相手に意思疎通する場合、単に「白」、又は英語からの外来語として「ホワイト」という単語を中心に形容詞（「真っ白」、「汚れた白」等）をつけて表現する。一方自然環境において「白」の概念を複数の次元で表現することを必要とするエスキモー（イヌイット族）は、数十の異なった言葉で表す¹¹。換言すればある民族、又は文化圏では生活環境によって形成されるコミュニケーション上の必要性から、その地域独特の「色彩語彙体系」を作り上げているということである。

「つまり「白」という語彙が、生活の必要性からたくさん分かれたのである。語彙の分化とは、それを使用する民族の自然環境の影響を受ける。たとえば、年をとったエスキモーが、仲間の集団の住むバンドから相当離れたところで、たまたま大きなアザラシをしとめたとする。彼一人では運べない。バンドに帰って仲間に告げる。もし、日本人だったら、白一色の雪原や氷のなかの一点を「白」だけでは説明できないだろう。たとえ、そこまでいく雪と氷の道の「白」に形容詞や形容句をつけてみても説明には限界がある。ところがエスキモーはごく簡単に、その地点にいたる道を教える。仲間は、まるでミツバチが蜜のある花のダンスの仕方で仲間に知らせるように、すぐ通じ合って、そのとおりのアザラシに到着することができるという。アザラシの脂は、エスキモーの生活の大事な暖と光源である。このように、民族は、その生活環境への対応から色彩の語彙をつくるから、民族ないし文化圏によって色彩語彙体系を異にしている。それは環境への対応の必要性によるもので、物質文明の発達度とは関係がない。」¹²

人は文化により、同じ色の物体や自然現象を観ても、それを呼ぶ言葉は民族や国家により異なる。それは、日常の会話での呼称や韻を踏んだ詩歌などの文語体にもみられることもあり、研究者の興味をそそる。例えば、同じ「山々」、「山脈」などについても日本では周知の通り「青い山脈」の青が、中国語では「山紫水明」にあるように山の本々の色は「紫」である。面白いのは日本人が小学唱歌としてなじみの深い「ふるさと」の中で「山は青きふる里」と類似した懐かしさをもって口ずさむのと同様にアメリカ人は、“America, the Beautiful”の歌詞では、“Oh, beautiful, for spacious skies, for amber waves of grain, for purple mountain majesties above the fruited plain, . . .”のように“紫の山々”として祖国の山の美を歌い上げている。

3. 日本人の生活様式の中の語彙と色彩

弥生時代（紀元前3世紀頃から後3世紀頃まで）に中国より渡来されたと伝えられている水稲耕作文化により、米飯を数千年以上主食としてきた日本では、米の成長過程、及びその料理方法に基づいて、それぞれ異なつた別の名称が付けられている。春、水田に緑の細い葉を真上に伸ばせているのは、「稲」である。それ等は初期においては「苗」と呼ばれ稲は成長して実を結び「穂」を垂れると、収穫されて「粉（もみ）」となり、その殻を精米過程で脱穀するともう稲ではなく「米」となる。更にそれに水を加え加熱すると、始めて「ご飯」であり、又洋風レストランでは「ライス」と呼ばれる。現在では余り食用されないが、この炊いた「飯」を干して水分を蒸発させ、保存食にした状態のものを「飯ひ（ほしいい）」又は「かれいい」と呼んだ¹³。しかし、一方英語圏では米が主食ではないため、“rice”の一言のみで、通常食卓上の皿に盛られた一種類の食物のイメージを意味する。このような地域では“rice”の語彙の前に“cooked”、“steamed”、“sticky”等を付け加えて、“rice”の状態を形容する。丁度これは自然現象である「雪」がさほど日常生活を厳しく左右しない温帯海洋国日本において、「ささめ」雪、「粉」雪、「わた」雪等のように雪の前にその状態を表す言葉を付加して意味の細分化を図るのと同様の現象である。

このように、人間の生息する周囲の自然環境、衣食住の生活様式は言葉、語彙を含めたコミュニケーション手段に多大の影響を与えていることがわかる。著者は以前、米国南部にあるメキシコ湾沿いのミシシッピ州を旅行中、ある博物館で「日本人は緑の概念を持たない。従って緑という語彙がない」というパネルを閲覧し、憤慨した経験がある。確かに日本の交通シグナルは「赤・黄・青」であると認識するが、英語では“red”、“yellow”及び“green”である。「日本人は緑の概念を持たない」というのは英語圏での自民族中心主義的認識¹⁴であり、異文化理解不足によるものであるとその時は感じた。しかし、帰国後日本人の緑の意識、関連語彙などについて更に探求してみると、古い文献には中国語や日本語の語彙には「青」は存在したが、「緑」は存在しなかった¹⁵とあり、従って緑の野菜や果物を取り扱う「青果市場」、「青い山脈」、「料理に青みを付ける」、「青野菜」、「青々と茂る森」等の表現が今尚、存続していることは事実である。

4. 「緑のない日本語」と青による置き換え

「緑」色の概念と存在について、更に考察する。「中国や日本やマヤの文化では、昔は緑がない。緑は、青という色彩語彙から分化していないのである。青は、空の色であり、日本の四方をめぐる海の色である。そして、温暖なこの島に豊かに茂る木々の緑は、たしかに空の青とは異なっている。何につけても、この二つの美しい色彩は、べつべつに分けて使いたくなる。そういう必要性が生じる。そうして、語彙は自然に分化していったのである。」¹⁶

しかし、ここで忘れてならないのは、確かにわが国の古来からの語彙に「みどり子」¹⁷や「みどりの黒髪」¹⁸という表現がある。だがどちらも緑色（green）としての意味合いは存在しない。前者の「みどり」は「幼さ」に加えて、古めかしい聖書や讃美歌の和訳からの表現を例に挙げ

ると、救世主として生まれた神の子、イエス・キリストの高貴さ、神々しさをも含めていると解釈できる。後者の「みどり」は女性の若く、艶やかな長い黒髪を美化して表現したものであり、両方とも賞賛のこもった言葉である。これらの「みどり」の語源を遡れば遅くとも太宝令のしかれた8世紀初頭には「みどり」の語彙が存在していたことが判明する¹⁹。

VI. 性別、年齢と色彩の関係

1. 性別と色彩

赤児が生まれると、日本民族を始め多くの民族はピンク系の柔らかな色使いの産着や「おくるみ」を女児に、一方ブルー系の空色の薄い色のものを男児に使用する傾向がある。我が国を中心に考慮すると、小中高校での制服は一般的に男子が黒か紺、女子は紺と白が中心のように観察される。大学生活の中では毎年、決まって前期の始まる4月から10月頃までの間キャンパスで黒色のスーツ、白のブラウス、黒のバッグに黒のパンプスを履いた女子学生を多く見かける。いわゆる「リクルート・スーツ」である。就職を希望する企業の説明会や面接に出席するために個性を隠ぺいし、画一主義 (uniformity) や均質性 (homogeneity) の伝統的価値観を重視する日本の体質を表している。勿論この10年来若者を中心に主婦、OL等をも巻き込んだ「茶髪ファッション」は就職活動時にはいつの間にか元通りの黒髪に戻っている。

学業を終え社会に出ても、男性の多くが、紺、グレー、又は茶の三色を中心に上下の衣服を選ぶ。落ち着いて仕事に従事する為の色であると同時に、長い学生生活における制服と同系色の衣服をまとっていると無難であり、一方、他人と混在した群れの中にいる安心感から脱却できないからであろうという推測も可能である。換言すれば社会全体が各種の職業においてそれぞれの着用する色彩の範疇を定め、一定の期待感が存在し、それからはみ出ないことが暗黙に求められていると考えられるのである。

2. 大人の保護色は灰色か

日本の大人の男性の日常の衣服の大半が紺か茶系、又は灰色の三色位に限られていることは既に述べた。そして、それは学校時代の同色の制服の色からはみ出さない事でグループ集団の一員としての、心理的な安堵感を持っているからではないかという筆者の考えをも上述した。裏返して考えるならば、その心理的選択が、均質性、画一性を重視してきた日本人の他人と異質でないことに努力しようとするファッション的な一面の具現化現象なのかもしれない。

周知の通り地球上の多くの地域で回教徒の女性は、その多くが「チャドル」という頭からつま先までをすっぽり隠す袋状の黒い衣服か、アフガニスタンの女性のように、「ブルカ」と呼ばれる灰色の衣服で体全体を覆っている。これは、宗教的背景を持つ社会規範として義務付けられているか、或いは伝統化されているイスラム教国家での女性の衣服であり色彩である。同時に周りの男性達から性的興味や暴力を阻止するためでもあると筆者は読んだ経験がある。最近のイラン等では、これ等の女性がヴェールを被るという社会的ルールがイランの政治革命（1978-79年）後、欧米での「ウーマンリブ」の影響とも合間って、その形、色彩等も少しず

つ緩和されている²⁰。

Ⅶ. 地域社会における色の溶け込み

1. 地域社会における色の溶け込み

日本の商業建築はもとより住宅建築にも欧米人、特に南ヨーロッパ、地中海の沿岸の人々からみると、地域としての一貫性に欠けると受け取られる。それはヨーロッパの古い伝統的な美意識から来るもので、建物は周囲のそれとの調和、コーディネーションを考慮しつつ、チグハグにならないよう溶け込んでいくのが好ましいとされる。スペインのバルセロナ出身のある若い男性エンジニアが語ってくれたことは、彼の母国では法的規則が特にある訳ではないけれども地域の建築物の屋根は、その殆どが例外なくオレンジ系で、壁は白色に統一して建てる。これは地中海から、エーゲ海、イオニア海、ティレニア海、ジブラルタル海峡を廻り、イベリア半島の大西洋側、ビスケー湾、ドーバー海峡沿岸にまで渡って共通して言えることであり、居住環境に関しては、オレンジ系と白の二色に統一するという暗黙の申し合わせがあり、そして実行するという南ヨーロッパ全域を巻き込む立体的美的感覚であるとのことである。

事実、筆者の住む名古屋近郊のベッドタウンを観察しても、各住居は（同じ施工主による一地区に集合して建築された類似したデザインの家々は別として）殆ど色調、スタイル、材質、サイズ等に協調性は見られない。一軒の家を例に挙げると、屋根は茶色、2階の壁は白色、一階の壁は赤レンガ、面格子は黒、玄関のドアはベージュ、ドアの前のコンクリートステップは灰色、1階の土に近い部分はプラスチック製の黄色の岩の表皮のようなものが貼り付けてあったりするものも珍しくない²¹。この色彩の採用に関しての一貫性が存在しない、言い換えれば一つ一つの物体、器（うつわ）が異なっていること自身が美しいという価値観は、建築物ばかりでなく、他の分野にも観察可能である。例えば、日本の食卓で使う食器であるが、いわゆる西洋料理に使う大皿、洋食皿、ティーセット、スプーン、フォーク、ナイフ等のカトラリー（フラット・ウエア）等は必ずと言って良い程、その色、デザイン、サイズ等がセットとして揃っている。一方伝統的な懐石等の日本料理に使用する食器は口取（くちとり）、向付（むこうづけ）、飯碗（めしわん）、汁碗、湯飲み類の全てが異なった色・デザイン等の陶器、漆器類にて食卓に並ぶ。そして、それ等の色彩や形の違い、窯元の意匠などを愛でながら、目と舌で食を楽しむのが日本流である。

画一主義、均質性を社会行動の中で重んじる日本人が、その住居或いは食器等に見られる、この一貫性の存在しないデザイン、色彩及び材質を採用するという現象は一体何故であろうか。更に研究を要するテーマでもある。

Ⅷ. 補色とコーディネーション

（財）日本色彩研究所が1964年に日本色彩配色体系“Practical Color Co-ordinate System”（略称PCCS）の名で発表した、色彩調和を主な目的とした色を24種類に分別した円形のカラーシステムがある²²。

上記の色相環において各々の対向位置にある色を「補色の関係」と呼び、日本人は伝統的にはこの「補色」の関係にある色との組み合わせを美しいと感じてきたのではないかと考える。その例を挙げてみる。例えば夏の女性用の浴衣であるが、従来は白地に藍色に染め上げたものが大半であった。その白と紺色の浴衣に対し、日本人は反対色（補色）である黄色系統、又は赤の帯を持って来る組み合わせを好んだ。白地に紺の浴衣に同系色の白の帯や紺（藍）の帯を結ぶことはまずない。目立たないし、映えないからである。筆者の25年間近い渡米期間中、日本の母が、アメリカで茶道を学ぶ娘のためにと夏用の絹地の組織りの群青（紫がかった紺）色の和服と、それに「合わせた」つもりなのであろう濃い（緋色に近い）オレンジ色の絹の帯が航空便で地球の反対側に届いた。紺とオレンジ色の組み合わせは日本人好みの「補色」関係の色彩ではある。しかし、欧米的色彩文化の中で4世紀半もの生活を続けていると、そこではマッチング (matching)²³、及びブレンディング (blending)²⁴ という二つの西洋式コーディネーション感覚にどっぷり順応させられており、この2色の和服と帯の組み合わせの着用が阻まれた。7年振りに始めて祖国の土を踏んだ時、母に内緒で紺の着物に合う白の帯を購入し帰米前のスーツケースの底に詰めたが、見つかってしまい慌てた経験がある。

日本人の中にはこの「マッチング」や「ブレンディング」の色彩感覚が（一部のファッションに敏感な世代や個人を除いては）まだ行き渡っていない印象を受ける。老若を問わずビジネスマンの中には茶系のスーツを着ているにも拘らず、黒の革靴を履いたり、その反対もまだ視察される。或いは黒のスーツ、黒の靴で着こなしているかに見えても、ソックスが白であったりして目を見張ることもある。

欧米人はこのコーディネーションの感覚や知識を、人の成長過程においては、いつ頃からどのように教わるのであろうか？ 筆者の限られた見聞であるが、ある時、ミズーリー州の片田舎の家庭に泊まった時の出来事である。朝4歳の息子が自分の部屋の引き出しからシャツとズボンを選んで、台所にいる母親の所へ引きずって行き、この二つはマッチしているかと尋ねた。母親は「そのシャツは青の縦縞、ズボンは茶の格子縞よね？」とのみ言った。すると息子が「そうだったね。青と茶はマッチしないし、上も下も両方に模様があってはいけないだよね」と言って引き返した。再び現れた4歳児は「ママ、この青の縦縞シャツにはこの白の無地 (plain white) のパンツがマッチするよね」と言うと、母親は笑顔で「良くできたわね」と誉めるシーンが続いた。4歳児に向かって「その二つはマッチしないから、パンツのほうは無地で、色は白にきなさい」と大人から子供へ指示してしまわないで、子供自身の自立性を育むため、その思考力、選択力に委ねた母親の育児、教育法に頭が下がった。

また、欧米人は日本人と大きく異なり、ハンドバッグ（かばん）と靴を同質素材、同色で揃えるのがお洒落だと考えている。欧米のデパートではそのようにコーディネートされたハンドバッグと靴（ブーツ）などがセットとして売場に一緒に並べられていることが多く、買物客にとっては選択が早く効率的である。しかし、日本ではハンドバッグと靴は各々の流通システムが異なるらしく、そのようなセットとしてコーディネートした販売方法を採用している店舗は名古屋のような大都市でさえ殆ど見かけない。やはり、日本人は食器と同様、「揃える」ことに

存在する美的感覚を持たない民族なのであろうか。

Ⅹ. 国際化の中での色彩の移り変わり

1. レクリエーションやスポーツにおける色

昔からの言い伝えとして、目が疲労した時には遠くの緑を見ると疲れが取れるという。それは、緑が「7色の波長の真ん中であって、もっとも目に優しい」からであるという²⁵。

囲碁を趣味とする夏樹静子は、白黒コントラストの強い碁石は目を刺激しひどい疲れ、痛みに悩まされた。日本棋院関係者の協力を得て濃い緑と薄い緑の、重さや厚みも願い通りの「グリーン碁石」が出来上がった。夏樹は言う。「申すまでもなく白黒碁石は長い伝統に根ざし、おかしがたい風格を備えたものだが（外国人に教える場合、白黒の人種問題を気にしないで済むし）、何事もカラー化、国際化の時代である。たとえば、力士のまわしも昔は黒一色だったそうだが、今はむしろ斬新さを競うようにカラフルに変わった。目にも心にも優しいグリーン碁石もあってもいいのではないか。」²⁶

日本のお家芸である柔道場の畳は伝統的に緑色が普通であるが、先般のアテネオリンピックを観戦した日本人には見慣れぬ「象牙色」（大理石カラー）であった。「その理由は『テレビ映り』。強い光だと画像が白くぼやけてしまうという。色を濃くしてやっとOKが出た。（アテネ五輪）生誕の地“記念色”にも、世界の視聴者への十分な配慮が込められた。表面を塩化ビニールで覆い、緩衝材を仕込んだ競技用の畳は、海外ではレスリングマットとして同じメーカーが作り、思わぬ色も登場する。当然、日本選手の中には違和感を覚える選手も。アテネを見学した、ある選手の本音は『畳が黄色じゃなくてよかった・・・』だった。日本人が日常で慣れ親しんだ、緑色の畳を使わない五輪の柔道はアテネが初。青い胴着に続くカラー畳の登場は、なんと気になる前例だ。」²⁷

2. 世界の「赤・白」の意義

我が国では「紅白」の2色は歴史を紐解いても平家軍が赤旗、源氏軍が白旗使用等のグループ分けの手段としても使用するが、殆どの場合、慶事を祝う色として使用される。建築物の「棟上式」に投下される餅の色、大晦日の夜恒例となっているNHKの「紅白歌合戦」等に顕著である。日本の歌舞伎には勧善懲悪観を扱った演目も多数あり、善人が白の顔料を塗り、悪人は赤ら顔に化粧して表現することが多い。ところが中国の京劇では「顔全体を赤く化粧した役者が出てくるが、この役は善い人の役であり、白い化粧をして出てくるのは悪人の役である」²⁸とある。

中国では「白色」が伝統的には死者を送る際に死体にまとう衣類の色とされており、従って欧米式の結婚式の花嫁の白いウェディング・ドレスが導入されたのはごく最近のことであると聞く。現に多くの香港（廣東人）の花嫁は21世紀に入った今日でもなお、赤の中国服を着ることが多い。日本でも江戸末期まで、日本での武士の切腹時の装束は白色とされていた。これも中国の「死」を意味する「白」との関連の影響であろうか。

一方、朝鮮民族が白色に愛着を感じ、農民達は汚れやすいのも厭わず、純白の野良着で農耕にでるといふ。「この民族は、白を『太陽の明るさを象徴する楽天的な色』と確信している。そういったのは、ソウル中央大学の金両基教授である。氏は、柳宗悦氏が李朝の白を哀愁の美ととらえたことに反論し、韓国人が受難の民であった面を過大に意識しすぎた認識だとしている。金教授は、いかなる受難にも屈しない民族の誇りと楽天性が白だと力説する。」²⁹

民族学者や言語学者の間で話題になるのは、ある民族が識別できる色の数であるが、例えば同じ天体に起こる自然現象の「虹」についても、日本人は7色（赤、橙、黄、緑・青・藍・紫）である。一方英米文化圏においては合計6色で（red, orange, yellow, green, blue and purple）、日本語の「藍」が存在しない。更に、メキシコの原住民であるマヤ族は黒、白、赤、黄、青の5色である³⁰。

3. モノクローム（白黒）の対比

英語の monochrome は、その語彙をギリシャ語の monos (alone 又は、single) と、chrōma (color) から成る合成語で、単彩画（法）、一色画（法）と和訳される。それは、通常白地の生地の上に、（出来上がりは白黒の二色と思えても）墨絵のような黒色を一色使って描く、の意であろう。日本人は歴史上早くから墨汁を使用してこの monochromal な画法を採用してきた。これは4世紀後半応神天皇の御世に百羅の阿直岐・王仁（あちき・わに）によって我が国に持ち込まれたとされている漢字が、インドから中国、韓国を経て日本に伝えられた仏教の伝来と共に発達したからであると考えられる。日本の平安一鎌倉一室町までの中世時代の原色を用いての極彩色の絵巻物が持て囃される一方で、日本人は白の和紙に鮮明に書かれた黒一色の墨汁との対比を古来より重視し、愛好した為であると思われる。近代そして、現代でもこの傾向が今なお、脈々と続いているのは、日本人の simplicity（単純性）を愛でる国民性からであろうか。

海外生活が四世紀半以上に及ぶ筆者の主観からみれば、日本の量販店の店頭に並列した圧倒的に多くの家電製品が、黒かねずみ色であるのに驚く。それはこれ等の二色が落ち着いた色合いで、目立たなくより多くの消費者に受け入れられ易いことと、製造企画の際、色の数を最小限に抑えることで大量生産が可能になり、一台当たりの小売り価格を低廉化することができるという経済的効率性にあるのだらうと考える。日本の正月には「三方」による伝統的な飾りつけがあり、地域や各家庭の家風により、洗い炭、洗い米、こんぶ、伊勢海老等を飾り付け、新年を祝う風習がある。この飾り付けの一部として歯朶（しだ）類の一種である「裏白（うらじろ）」を左右に垂らす地域が多いのに気付く。この裏（見えない部分）が白いしだは「腹が黒くない、二枚舌を使わない人」への信頼の象徴とされてきた。「昔から歯朶といえば裏白（ウラジロ科の常緑多年草）を指すことが多く、シダはその下垂れるさまからきた名といわれる。歯朶の「歯」は齢（よわい）に通じ、「朶」は枝で、長く伸びるものの意なので、歯朶すなわち裏白は常緑で枯れないこともふくめて、長寿の縁起として注連縄（しめなわ）などの新年の飾りとする習慣になった。その葉裏の白いのを夫婦共白髪にたとえ、また小葉が相対するので「諸向」として夫婦和合の象徴とした。なお、シダ植物シダ類は日本には約八百種ある。」³¹

この白と黒の色彩を人間の社会行動、その人徳などに当てはめて揶揄して使う民族も幾つか存在する。「白と黒のシンボリズムについては、アフリカの大半の地域の事例が集められていて、かなりの程度の一般化が可能である。特に道德の次元における一般化は容易である。人が善くて気のおけない優しい人は、つまりいつもオープンで下心をもたない人は「腹が白い」とみなされている。他方、邪な考えをもつ人は、「腹が黒い」といわれるだろう。

4. 色彩と事故の関係

桶村久美子は“色彩の雑学”の中で「日本は白や青の車が好まれると言われていますが、車の色と交通事故にはどんな関わりがあるのでしょうか？次の表はアメリカのデータで、2,048件の交通事故から車体の色を分析したものです。第一位が青で、次いで緑・グレー・白と続き、事故の少ない色は黄やゴールドとなっています。好まれている色が事故に要注意とは皮肉なものです。なぜ、青の車は要注意なのか、色彩の理論で解明できます。たとえば、赤、黄、オレンジといった暖色系と、青、青緑などの寒色系の同じ大きさの色紙を並べて、少し離れたところから、この色紙を見比べてみると、暖色系の色紙は寒色系の色紙よりも大きく浮き上がって見えるように感じます。つまり、人間の目には暖色系の色は膨張して映り、寒色系の色は縮小して見えるので、前者は実際の位置よりも近くにあると感じ、後者はより遠く感じてしまうのです。車の場合も同じで、赤と青の車が前を走っていたり、止まっていたりすると、青い車の方が遠くにあると感じて車間距離が短くなってしまうために、追突される率が高くなるという結果になります。

色彩理論では暖色系や明るい色を「進出色」、寒色系や暗い色を「後退色」と呼んで区別していますが、狭い部屋を広く見せようと思えば、壁やカーテンにブルー系の「後退色」を使うといった応用の仕方があります。³²

交通事故率の高い自動車の色		
順位	色	事故率(%)
1	青	25
2	緑	20
3	灰色	17
4	白・クリーム色	12
5	赤・マルーン色	8
6	黒	4
7	ベージュ・茶色	3
8	黄・金色	2
9	その他	9
		100
(資料)Eric P. Danger		
"Using Colour to Sell"1968. p.165		

☆ 桶村久美子 色彩の雑学 ☆

5. 色のイメージと化学染色の普及

それぞれの文化、或いはその構成員である各個人にも一つの特定の色に対して何らかのイメージ、言葉でも置き換えられる概念を有するという性質を持っている。例えば「花言葉」と俗に呼ばれる。「赤いバラ」は「情熱」「愛情」、薄紫のすみれは「純潔」というような例である³³。では「白」のイメージというと（前述の中国での死装束としての白、韓国の労働着としての、白等も存在するが）、やはり「清純」、「純潔」等無垢な印象が強い。この特徴から白はウェディングドレスとして現代では世界の多くの女性に着用されていると考える。歴史を紐解いてみると、

ローマ時代にはサフランの花で染めた黄色が縁起がよく花嫁には相応しい色とみなされた³⁴。しかし、近代の17世紀（バロック）、18世紀（ロココ新古典主義）時代になると、ヨーロッパの皇族たちが当時は高価とされた白、又は銀色のウェディングドレスを用いたことから、ステータスシンボルとして、徐々に民間にも白いドレスが定着していった³⁵。

19世紀の中葉（1856年）に英国人ウィリアム・ヘンリー・パーキンが化学染料を合成することを発明した。「取り扱いが簡単で色が鮮明、しかも安価であったことから、日本でも輸入されました。以来、染料は天然染料から化学染料に主役を譲ることになりました。それについて色合もレモン色、オリーブ色、カナリア色などカタカナ名が現れるようになりました。また、明治時代の末に流行した、華やかな緑がかかったブルーを「新橋色」といったのは、東京新橋の芸者衆が愛用した着物の色によるものです。この頃、伝統ある柳橋に対し、新橋には政財界の新人が集まったので、外国から輸入したモダンな色がいち早く取り入れられたようです。」³⁶

X. 終わりに

小稿中、筆者が四半世紀もの間、主にアメリカ合衆国の中西部地域・中部そして南部テキサスと太平洋の亜熱帯ハワイ大学のキャンパスと、イギリス領香港大学で教鞭を執った経験があることは前述した。白人がリードするいわゆる“WASP”³⁷の環境に住み常に東洋人として自分が黄色人種であることは白人“White”に対し有色人、即ち“colored”としての意識をいやがおうにも認識せざるを得ない日々を送った。しかし、この長い経験の日々は筆者に決して劣等感を与えることなく、むしろ“colored”として自己認識を新たにし、祖国の歴史の長さ、文化の緻密さ、国民性の勤勉性といったプラス側面に気づき、返って誇りにさえ感じている。

辻信一は“ブラック・イズ・ビューティフル”の中で米国黒人の身体表現について、かつてはその人種差別の厳しかったアメリカの歴史を振り返り、最近のメディア、舞台・スポーツ界等公の場で活躍する黒人の姿勢、表情、しぐさ、身振りなどが「異なる身体性」として一般白人、アメリカ人には印象付られていた。しかし、“白いアメリカ”と“黒いアメリカ”という二重構造は、建国以来現在に至るまで、米国の社会と文化の性格を決定する基本的な要素だった。白人と黒人の間のいわゆる“人間関係（レイス、リレーションズ）”と特徴づけてきたのが、“同化（アシミレーション）”（黒人の白人化）と“分離（セグレゲーション）”という一見相矛盾したふたつのテーマだろう。しかし、近年このふたつのテーマの枠におさまらないような思考や行動が多く、ひとつの文化的な流れを形づくるようになった。そしてそれは特に身体的コミュニケーションという場面で著しい効果を発揮しているように見える。」³⁸と述べている。

中国や日本の長い歴史とは異なり、17世紀前半に清教徒による新大陸への定住以来、僅か380年余りの短い歴史の中でも既にアメリカは19世紀中葉には奴隷を解放し、20世紀後半頃からは政治、外交、スポーツ等の文化一般に黒人（Black Americans）が数多く輩出し徐々にではあるが、WASP主流文化との差をせばめつつある。

日本人の色彩感覚も最近では欧米のその影響もあつてか、急速に西洋感覚に近づいている感がある。「文部科学省認定ファッションコーディネート色彩能力検定」（色彩検定）という長い

名称の資格検定試験が認定され、3級に始まり1級までの等級に分かれていて、認定制度を実施している。事実、高級ホテルで開催される結婚披露宴などのテーブル上のフラワー・アレンジメント等にも会場のインテリアに調和させた目でカラー・スペシャリストの手による装飾であると解る色彩の配色がなされていて、観るものを楽しませてくれる。

以上の一つの色彩、複数合わさった色の放つ人間の社会生活の中におけるコミュニケーションの大きな役割を通時的、共時的側面から論述してきた。当該分野に関しては、まだ先行研究も比較的少なく、異文化間の外交関係は勿論のことビジネスマン、社交、友好のためにも今後更なる思索、考察が期待される。

脚注

1. 平成 17 年 9 月の衆議院選挙に再選出された、北海道出身の Y 女史によると、女性国会議員の間で、「10%に満たない女性の代表としての存在とパワーをスーツの色彩でもアピールしよう」という申し合わせがあると筆者に告げてくれた。
2. 宇野俊一、大石学、小林達雄、佐藤和彦、鈴木靖民、竹内誠、濱田隆士、三宅明正 (1991) 『日本全史(ジャパン・クロニック)』 p.86 講談社
3. 薄い藍色。花色。「はなだ草」は露草の異称。新村出 (1955) 『広辞苑』 第二版、p.1808 岩波書店
4. 宇野俊一、大石学、小林達雄、佐藤和彦、鈴木靖民、竹内誠、濱田隆士、三宅明正 (1991) 『日本全史(ジャパン・クロニック)』 p.178 講談社
5. 同上 p.179
6. 東京商工会議所(編) (2001) 『カラーコーディネーションの基礎 - カラーコーディネーター検定試験 3 級公式テキスト -』 p.32 中央経済社
7. “gradation” とは 規則的な色相、明度、彩度などの変化や、形態、質感などの造形上の変化をさす。色彩におけるグラデーションは前者である。
大井義雄、川崎秀昭 (1996) 財団法人日本色彩研究所 (監) 『カラーコーディネート入門色彩』 改訂版 p.79 日本色研事業株式会社
8. Edward Sapir (1884-1939) 米国の言語学者; Benjamin Whorf (1897-1941) 米国の文化人類学者
9. 小池生夫 (編) (2003) 『応用言語学』 p.243 研究社
10. 田中春美、田中幸子 (1996) 『社会言語学への招待』 pp.6-7 ミネルヴァ書房
11. 村山卓也 (1988) 『人はなぜ色にこだわるのか』 p.14 KK ベストセラーズ
12. 村山卓也 (1988) 『人はなぜ色にこだわるのか』 pp.14-15 KK ベストセラーズ
13. アメリカ合衆国では一般に “minute rice” と呼ばれる同種の乾飯が販売されており、熱湯で数分戻し、牛乳や砂糖、レーズン等を混ぜ、シナモンの粉をトッピングして食べる地方 (中西部) もある。
14. 自民族中心主義 (ethnocentrism) ・自分の文化を中心とした物指しで他の文化を押し量り、価値判断をしようとする考え方。
15. 村山卓也 (1988) 『人はなぜ色にこだわるのか』 p.15 KK ベストセラーズ
16. 村山卓也 (1988) 『人はなぜ色にこだわるのか』 pp.15-16 KK ベストセラーズ
17. 「緑児・嬰兒」(古くはミドリコ。「みどり」は未熟・若輩の意) 三歳ぐらいまでの幼児。
孩児 (がいじ) えいじ。新村出 (編) (1955) 『広辞苑』 p.2125 岩波書店

18. 「緑の黒髪」生々つつやのある黒髪。新村出（編）（1955）『広辞苑』p.2125 岩波書店
19. 701年8月3日、697年の文武天皇の即位直後から編纂事業が進められていた大宝律令がととのった。新律令の編纂は持統天皇の強い要請により、文武天皇の皇子刑部親王を中心に藤原不比等、粟田真人、下毛野古麻呂をはじめとして、伊吉博徳らの唐への留学経験者や渡来系氏族の出身者などを含む19人のスタッフによって進められた。『日本全史』（1991）p.110 講談社
20. 中西久枝（1996）『イスラムとヴェール—現代イランに生きる女たち—』p.109 昇洋書房
21. 愛知県日進市岩崎町の某邸宅
22. 大井義雄、川崎秀昭（1996）『カラーコーディネーター入門—色彩—』p.12 日本色研事業研究所
23. “matching”とは二つ、又はそれ以上の色彩が、欧米人のファッション色彩感覚に快く取り合わされること、地域差、個人差はあるが「マリーン・ルック」のような上着がネイビー（紺）でパンツが純白などが例。
24. “blending”はその名の通り、二つ又はそれ以上の色が類似性があり、かち合わず、溶け合って心地よい色合わせであること、例えばピンク等のブラウスにラベンダーのスカート、黄土色のワイシャツに茶系のツイードのジャケット等が挙げられる。
25. 夏樹静子 “グリーン碁石の歩み”『中日新聞』1993年6月17日
26. 同上
27. 福田要 「TV優先 疊に新色」『中日新聞』2004年8月17日
28. 村山卓也（1988）『人はなぜ色にこだわるのか』p.67 KKベストセラーズ
29. 村山卓也（1988）『人はなぜ色にこだわるのか』p.55 KKベストセラーズ
30. 村山卓也（1988）『人はなぜ色にこだわるのか』p.15 KKベストセラーズ
31. 新日本大歳時記新年（2000）p.106 講談社
32. 桶村久美子 “色彩の雑学：暮らし 社会” インターネット
<http://osaka.yomiuri.co.jp/shikisai/sz41224.htm>
33. Internet <http://www.j-area2.com/flower/rose/message.htm>
34. 坂井妙子（1997）『ウェディングドレスはなぜ白いのか』p.1 徑草書房
35. ウェディングドレスの歴史, Internet <http://www.galstown.com/6/chapel/hipopotamasu/rekisi.htm>
36. 所鳳弘（2005）「絹と染色」『川が育んだ日本伝統文化展 II』p.38 岐阜県美術館
37. “WASP”とはWhite, Angle-Saxon Protestantの頭文字で、アメリカ社会での主流の人々をひとまとめに表現したものである。
38. 辻信一（2005）「ブラック イズ ビューティフル」鷺田清一、野村雅一（編）『叢書 身体と文化—3 表象としての身体—』p.303 大修館書店

参考文献

- 宇野俊一、大石学、小林達雄、佐藤和彦、鈴木靖民、竹内誠、濱田隆士、三宅明正（1991）『日本全史（ジャパン・クロニック）』講談社
- 大井義雄、川崎秀昭（1996）『カラーコーディネーター入門—色彩—』日本色研事業研究所
- 桶村久美子 “色彩の雑学：暮らし 社会” インターネット
- 小池生夫（編）（2003）『応用言語学』研究社
- 坂井妙子（1997）『ウェディングドレスはなぜ白いのか』徑草書房
- 田中春美、田中幸子（1996）『社会言語学への招待』ミネルヴァ書房

- 辻信和 (2005) 「ブラック イズ ビューティフル」 鷺田清一 野村雅一 (編) 『叢書 身体と文化 - 3 表象としての身体-』 p.303 大修館書店
- 東京商工会議所 (編) (2001) 『カラーコーディネーションの基礎 - カラーコーディネーター検定試験 3 級公式テキスト-』 中央経済社
- 所鳳弘 (2005) 「絹と染色」 『川が育んだ日本伝統文化展 II』 岐阜県美術館
- 中西久枝 (1996) 『イスラムとヴェール - 現代イランに生きる女たち-』 昇洋書房
- 夏樹静子 「グリーン基石の歩み」 『中日新聞』 1993 年 6 月 17 日
- 福田要 「TV 優先 畳に新色」 『中日新聞』 2004 年 8 月 17 日
- 村山卓也 (1988) 『人はなぜ色にこだわるのか』 KK ベストセラーズ
- 『新日本大歳時記新年』 (2000) 講談社